REPORT 6

葬送儀式はいま —葬儀の実践に関する回答から—

- 葬儀に関する設問は、今回の宗勢調査で初めて取り入れられた。
- 巷間、喧伝される葬儀の簡略化の実態は……

「葬式仏教」と揶揄されて久しいが、それは、少なくとも葬儀でだけは寺院が檀信徒と繋がっていることの表現でもあった。しかし、近年では、「葬式離れ・墓離れ・寺離れ」の三離れが言われ、葬儀という接点すら失われようとしているのかもしれない。

宗勢調査の結果によれば、寺院の主な収入源が「檀家布施収入」との回答は81.6％となっており、「葬儀離れ」は今後の寺院運営に直結する問題となり得る……。

1．檀家数と年間葬儀数との関係

かつて、「一寺院の一年間の葬儀数は、檀家数の一割程度」と言われていたが、近年は５％程度ではないか、との声を耳にする。

今回の宗勢調査の結果から、まず、檀家数と年間葬儀回数の関係をみてみたい。

(表6-①)

1～ 10戸	16.4%	401～ 500戸	5.8%
11～ 30戸	9.2%	501～ 600戸	5.2%
31～ 50戸	7.0%	601～ 700戸	5.2%
51～100戸	5.5%	701～ 800戸	4.8%
101～200戸	5.7%	801～ 900戸	4.8%
201～300戸	5.7%	901～1000戸	6.5%
301～400戸	5.6%		

※1000戸以上の寺院は中央値がとれないため除外してある。

≪算出方法≫

葬儀回数の中央値（例：1～5回であれば3回とする）に分布の百分率を乗じて、檀家数ごとの年間回数を算出し、檀家数の中央値（1～10戸であれば5.5戸）で割ることにより、檀家数に対する葬儀の件数の比率を算出した。

檀家数51戸以上の場合、年間葬儀数の割合は、檀家数の約５～６％であることがわかり、概ね通説が裏づけられたといえよう。

檀家戸数の少ない寺院に於いて数字が大きいのは、過疎地域に於ける檀家の高齢化の問題との関連も考えられるかもしれない。

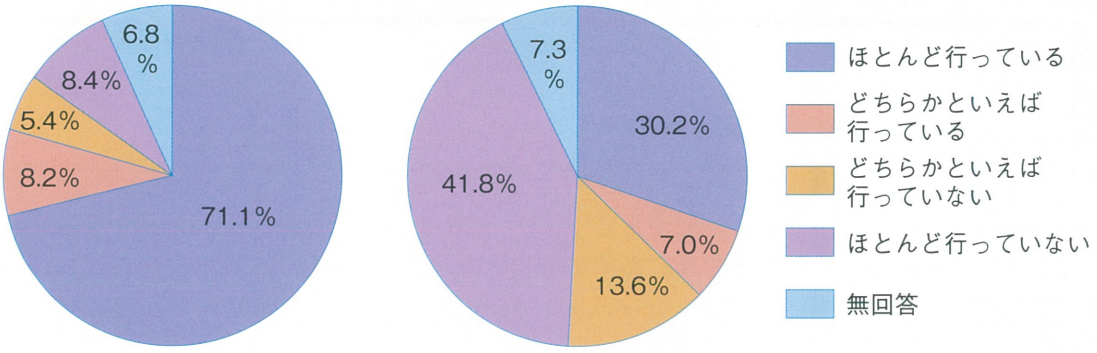
2．葬儀の実践

葬儀は、地域の風習などによって儀式の営み方に大きな相違があり、一概にスタンダードを言うことは難しいが、宗勢調査では、「枕経」、「納棺への立ち会い」、「通夜」、

「通夜、葬儀での法話」、「通夜、葬儀での本尊奉掲」、「法号の意義、意味についての説明」、「火葬場への同行」、「初七日忌法要」、「中陰忌（五七日忌や七七日忌）法要」、「埋葬時の墓前経」の実践についての設問があった。ここでは、全体合計のグラフを提示し、加えて調査結果を教区ごとに分析することにより地域的傾向を中心に考察してみたい。

① 枕経と納棺

枕　経（グラフ6-②）　**納棺への立会い**（グラフ6-③）



≪教区分析≫

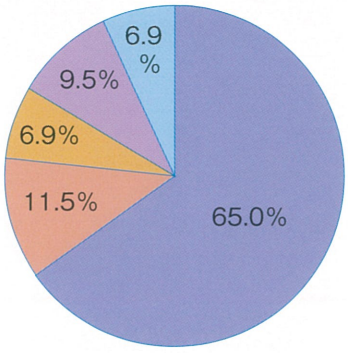
枕経の実施率については「どちらかというと行っていない」と「ほとんど行っていない」の合計が、京浜教区で50.0%、北関東教区で35.6%と高く、京浜・北関東教区では枕経があまり行われなくなってきていることがうかがえる。一方、山静・中部・北陸・近畿・九州・東北・北海道教区では80～90%が、枕経を「ほとんど行なっている」と回答しており、高い実践率を維持している。

しかし、檀家が遠隔地に居住し、すぐに訪問できないといった問題や、御遺体を自宅ではなく、葬儀場や遺体安置施設に運んでしまうといった事例の増加が言われており、今後、枕経の実践が困難になって行く可能性も否定出来ない。

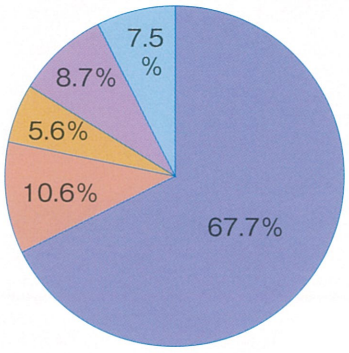
納棺への立ち会いを「ほとんど行なっている」と答えている比率が高いのは、北陸66.7%、東北54.9%、山静53.3%の各教区であり、他の教区は「ほとんど行なっていない」との回答が40～50%となっている。納棺立ち会いをする教区としない教区が分かれており、これは地域事情によるところが大きいと考えられる。

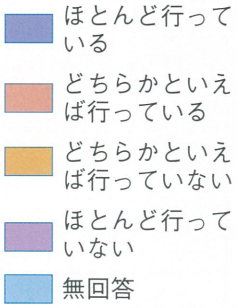
② 通夜・葬儀での実践

法　話（グラフ6-④）



本尊奉掲（グラフ6-⑤）





≪教区分析≫

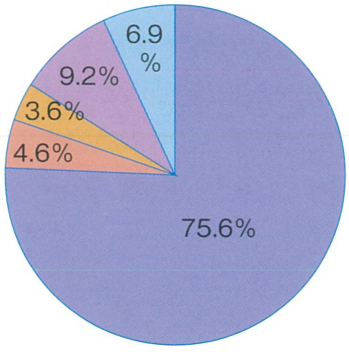
通夜・葬儀の場での法話については、全体では「ほとんど行なっている」と「どちらかといえば行っている」の合計が76.5％となり、多くの寺院が実践している。特に北海道教区は「ほとんど行っている」が87.6％と高く、地域として法話が盛んであることが分かる。

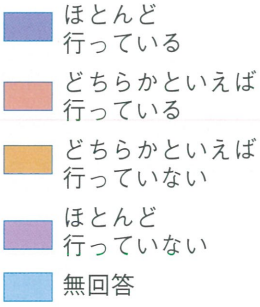
一方、九州教区は「ほとんど行っている」が48.8％と半数を切り、「どちらかといえば行なっていない」と「ほとんど行なっていない」の合計が28.6％と、法話をあまりしない寺院が３割近くある。

また、本尊奉掲については、全体では「ほとんど行っている」と「どちらかといえば行っている」の合計が78.3％である。「ほとんど行っている」の比率が高かったのは、北陸教区84.6％と北海道教区82.5％。一方、「ほとんど行なっていない」と答えた比率が他教区に比べて高かったのは、北関東20.7％、千葉15.9％、京浜13.5％の各教区であった。

③ 遺族とともに火葬場へ

火葬場への同行（グラフ6-⑥）





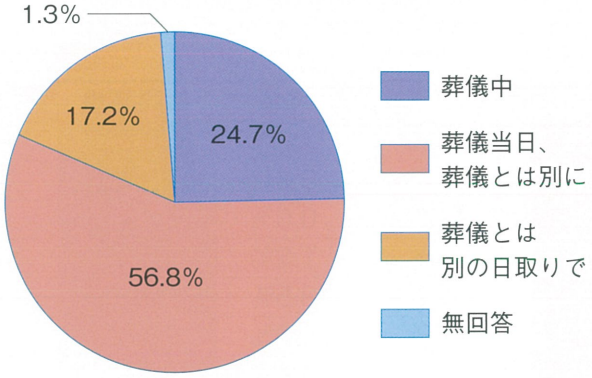
≪教区分析≫

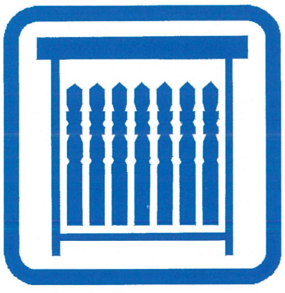
とくに注目されるのは、九州教区39.2％、北海道教区34.5％が「ほとんど行なっていない」と答えていることである。葬儀前に火葬が行われ、遺骨の状態で葬儀を行う風習があることも考えられるが、今回の調査のみでは何とも言い難い。

火葬場に同行することは、炉前、骨上げの読経等により、丁寧な供養となるのみならず、火葬中の時間を遺族とともに過ごすこととともなり、近年僧侶に期待されている、遺族に「寄り添う」姿勢を示すことにも繋がるであろう。

④ 初七日忌法要

初七日忌法要をいつ行っているか（グラフ6-⑦）





≪教区分析≫

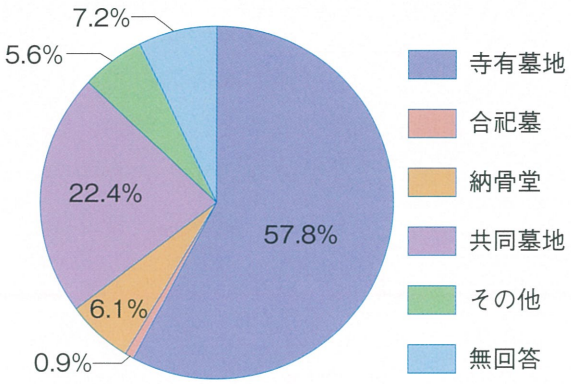
全体合計によれば90％の寺院が初七日忌法要を実践しているが、それをいつ行っているかについては、「葬儀当日、葬儀とは別に」（繰り上げの初七日）が56.8％、「葬儀中」（付け七日）が24.7％、「葬儀とは別の日取りで」（本来の初七日忌を意味するであろう）は17.2％にとどまった。

葬儀中に行う比率が高いのは千葉教区60.0％、北関東教区54.7％であった。式場の都合等で、火葬後の初七日忌が行いにくいことや、葬儀前に火葬するため葬儀に引き続いて行うことなどが理由として考えられるが、これもこの調査からだけでは推測の域を出ない。

一方、葬儀とは別の日に初七日忌を行う比率が高いのは北海道教区80.5％、九州教区50.3％であった。この２教区は「火葬場への同行」の率が低い地域でもあり、火葬の方法との関連が推測される。

⑤ 遺骨の埋葬場所

遺骨をどこに埋葬(埋蔵・収骨)しているか (グラフ6-⑧)



「あなたの寺院の檀徒は、遺骨をどこへ埋葬（埋蔵・収骨）していますか」という問いに対する回答を、教区別に集計すると以下のようになる。

(表6-⑨)　1位回答　2位回答

教区名別	寺有墓地	合祀墓	納骨堂	共同墓地	その他	無回答
京　浜	74.7%	1.0%	1.9%	10.8%	4.6%	6.9%
千　葉	63.3%	0.6%	0.4%	28.0%	2.8%	4.8%
北関東	70.4%	1.2%	0.0%	15.4%	5.3%	7.7%
山　静	77.9%	0.0%	1.2%	10.6%	3.2%	7.1%
中　部	53.1%	1.6%	3.5%	22.3%	8.2%	11.3%
北　陸	75.8%	0.7%	1.8%	10.5%	3.2%	8.1%
近　畿	52.6%	0.6%	4.5%	31.0%	6.0%	5.3%
中四国	35.3%	1.1%	4.3%	36.8%	15.1%	7.4%
九　州	28.6%	2.4%	30.1%	25.3%	5.1%	8.4%
東　北	53.1%	1.3%	1.3%	31.4%	5.8%	7.1%
北海道	11.3%	0.6%	36.7%	38.4%	4.5%	8.5%
全体合計	57.8%	0.9%	6.1%	22.4%	5.6%	7.2%

≪教区分析≫

遺骨の埋葬場所に関しては、「寺有墓地」が全体で57.8％、とくに京浜、北関東、山静、北陸の４教区で70％を超えている。「共同墓地」は全体の22.4％であるが、近畿、中四国、東北、北海道の４教区では30％を超え、とくに中四国、北海道の２教区に於いては、１位回答となっている。納骨堂は全体では6.1％にとどまるものの、北海道36.7％と九州30.1％の２教区では寺有墓地の数字を上回っている。

千葉教区では、ほぼ寺有墓地２：共同墓地１の割合であり、中部教区は各項目の数値が全体の平均に近い数字となっている。

コラム 調査余滴③

急がれる代務寺院の現状把握

	平成３年（代務寺院率）	平成24年（代務寺院率）
京　浜	19ヶ寺／801（ 2.3%）	21ヶ寺／755（ 2.7%）
千　葉	111ヶ寺／574（19.3%）	147ヶ寺／577（25.4%）
北関東	9ヶ寺／266（ 3.3%）	15ヶ寺／261（ 5.7%）
山　静	109ヶ寺／770（14.1%）	147ヶ寺／761（19.3%）
中　部	17ヶ寺／341（ 4.9%）	44ヶ寺／335（13.1%）
北　陸	40ヶ寺／337（11.8%）	43ヶ寺／330（13.0%）
近　畿	42ヶ寺／682（ 6.1%）	74ヶ寺／678（10.9%）
中四国	62ヶ寺／460（13.4%）	80ヶ寺／462（17.3%）
九　州	20ヶ寺／485（ 4.1%）	28ヶ寺／485（ 5.7%）
東　北	17ヶ寺／303（ 5.6%）	27ヶ寺／292（ 9.2%）
北海道	15ヶ寺／249（ 6.0%）	16ヶ寺／242（ 6.6%）

・平成3年、平成24年寺院名簿より算出。
・「代務寺院率」とはその教区の全寺院数に占める代務寺院の割合。
・寺院・教会・結社の区別をせず集計。
・個別の事情を問わず、名簿上の代務寺院記載のみを抽出。

過疎化に伴う檀信徒の減少、あるいは寺院の過密といった事情で、専任住職が不在となり、兼務によって護持されている代務寺院の数は増え続けている。

上の表は、平成３年と平成24年の代務寺院数を、教区ごとに算出したものである。千葉教区では４ヶ寺に１ヶ寺、山静教区では５ヶ寺に１ヶ寺が代務寺院となっている。

代務寺院は、今後も、全国で増えて行くことが予想されるが、過疎地域は、人口減少社会を先取りしていたとも言えるのであり、代務寺院の問題を考えることは、これからの社会変動への対応を検討することに繋がる筈である。

代務寺院問題を、すべての宗門人にとっての課題として受け止めたい。